

# 役員\*企業\*訪問

## 第41回 本会 江頭啓介監事 (福岡医療関連協業組合 理事長)

今回は、江頭監事が理事長を務める医療法人社団江頭会さくら病院を6月上旬に訪問しました。福岡医療関連協業組合の設立経緯に加えて、民間病院の地域における役割や今後の医療の問題点等を語っていただきました。



江頭啓介監事  
(医療法人社団江頭会さくら病院理事長)

### 企業概要

企業名：医療法人社団江頭会 さくら病院  
設立：1983年(昭和58年) 4月1日(開業日)  
代表者：理事長 江頭啓介  
所在地：〒814-0143  
福岡市城南区南片江6丁目2-32  
TEL：092-864-1212  
FAX：092-865-4570

### 民間病院の地域における役割

ー福岡医療関連協業組合の事業に関して伺います。医療機関の寝具類のリースやクリーニング、備品の配送などに取り組んでおられますね。

**江頭**：当組合は、1962年に福岡県私設病院協会の業務の一環を担うものとして設立しました。取扱い製品には感染性廃棄物が含まれていますから、その取扱いや働く人の安全性に最も気を使います。それと、医療現場に遅滞なく商品をお届けする流通面の整備も重要です。品質管理、その特殊性に配慮することが大切で、ISOも取得しています。なにより働きやすい職場づくりを行って、経営効率を向上し従業員の待遇を改善していきたいですね。

ーこちらの病院はお父様の代からですか。

**江頭**：父は、佐世保で外科医をしていましたが、

私はそれを継がずにこの病院を創業しました。1983年、卒業後10年経ってからです。ちょうど第一次医療法改正が予定されていた時ですが、戦後初めての改正ということで、これからはベッド数も規制されて病院も作りにくくなるだろうと考えて、慌てて開業しました。父親からはもっと勉強しろと言われましたが、一応外科も内科も麻酔科も勉強したあとでした。1983年4月1日に開業しましたが、前の日まで勤務医として勤めていたので、勤務が終わってから建築現場に来て、それから面接したりして、計画も全部自分で作って手づくりの開業でしたね。

ーこちらは急性期から回復期まで揃っていますね。

**江頭**：うちの病院は急性期から回復期ー今は地域包括ケア病床というのですが、そういう機能を持つ病院です。現在152床で中小規模の病院ということになります。

日本は高齢社会になっていて、高齢になると一人の方がいろいろな病気をもつというようになります。そういう時代には、いくつか病気をもっておられる方を総合的に診るという総合診療的機能が我々に求められるわけなんです。うちは総合的診療ができる内科のかかりつけ医です。専門医と総合診療医と一緒に診ていくような仕組みを作って、地域の生活の場で提供しています。

もともと私の専門は消化器内科ですが、総合診療医の資格も持っています。うちのドクターは、循環器内科や呼吸器内科など、それぞれ専門医



総合診療機能や連携の必要性を説明する江頭監事

ですから、うちでできるものはうちでやり、もっと専門性が必要な場合は基幹病院とか大学病院に紹介します。外科手術などは基幹病院で受けて、それが良くなったら地域の病院に戻る、それを医療連携とか病病連携とかいいますが、福岡はわりとうまく機能しているような気がします。

## 医療の2040年問題

一人の幸福というものを考えるときに、人生の終盤でどういう先生と知り合うか、ということも重要ですね。

**江頭**：まあ、お互いの出会いの運ということもありますが、医療の立場からすれば、できるだけ同じレベルの医療を提供したいわけです。AさんとBさん、Cさんの受ける医療が大きく違う、というようなことではなく、一定の幅のなかで収まるような、医療の標準化ということ、提供する側は追求していかなければならないわけです。そういうなかの医療連携ですが、どういう病院を紹介できるかということはなかなかテキストにはできない情報で、そうしたことも地域密着型病院の役割です。

昭和22年から24年に生まれた団塊の世代が、2025年には全員後期高齢者になる、いわゆる2025年問題があります。それに向けて医療体制をどうするか、というのが、この10年間くらいの医療政策の柱で、私どもは、地域医療計画と地域包括ケアという二本柱で取り組んできました。

そして、今度は2040年に向けての医療をどうするかという課題が動き出しています。2040年には高齢化がなお進んで、高齢者が最も多くなるんですね。ある程度年をとると、いくつもの病気をかかえて、ある不自由さを抱えながら生活していますから、「治す医療から、治し支える医療へ」というように目標が変わってきました。

そうすると、医療だけでは仕事ができなくなるわけです。医療の現場でも介護する人が必要になるし、家で過ごす人は、介護が必要で医療が少し必要ですね。医療連携から医療介護連携、そのひとに必要な局面で、医療と介護を一体的にサービスすることで暮らしを支えていくということが求められるので、今そうしたことに向けて取組みを始めています。

一隣には介護施設も建築中ですし、こちらにはすべてありますね。

**江頭**：本館の一番上は緩和ケア病棟ですが、私どもは福岡市で一番初めに緩和ケア病棟を作りました。重い病の患者さんも多かったですし、大学病院などと連携しているときに、そういう病棟も必要だと感じました。

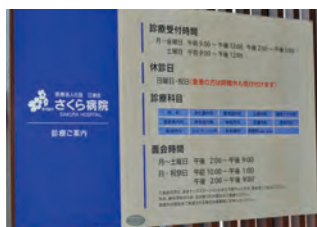
## コロナ渦で医療の使命を再確認

—医療面で、福岡は本当に恵まれていると思います。

**江頭**：宗像地方には、江戸時代から常礼とか定礼という仕組みがあって、村にお医者さんに住んでもらって、常に定まったお米だとか作物とかをお医者さんに渡しておくわけです。量は畑の広さとか、能力によって決まっているんですが、病気になったら、村の人はお医者さんに診てもらえる。お医者さんは常礼医とって、村におられたんです。これは国民健康保険の制度の始まりとも云えます。

—福岡は医療の先進地ですね。

**江頭**：コロナで医療がひっ迫しましたが、福岡県は地域連携ができていたので、医療崩壊を起しませんでした。私は私設病院協会の会長をしていますから、こういう時にこそ民間がやらないといけないということで、40年位ぶりにホテルに当直しました。もちろん公立病院も含めてみんな頑張りました。民間病院って忙しくて、若い人は手いっぱいですから、多くの病院から院長が当直に来てくれました。皆さんには、「なぜ医者になったのか思い出しましたね。」と話しましたが、協力していただいて嬉しかったですね。



◀総合診療的機能を目指すさくら病院



◀右の棟は外来や緩和ケア病棟等がある本館、左の棟は通所リハビリテーション等がある別館

インタビューを終えて

さくら病院の応接室に入ると、手前のケースには、大村藩の藩医であったご先祖の書かれた医療に関わる古文書が収められています。奥の方には漢方薬を入れていた古い小物筆筒も置かれていました。私たちは、国民皆保険制度のおかげで高度な医療を享受していますが、各地には、近代化が始まる以前から高い志を持って医療に携わられた方々がいて、その心が脈々とつながって制度が支えられていることを知りました。

(中小企業診断士 藪田久恵)

